

日刊建設工業新聞

発行所 ©日刊建設工業新聞社 2013 〒105-0021 東京都港区東新橋2-2-10 電話03(3433)7151 URL:http://www.decn.co.jp/

2013年(平成25年) 1月24日(木曜日) (10)

2013年(平成25年) 1月24日(木曜日)

(10)



竹林 征三
富士常葉大学名誉教授
山口大学時間学研究所客員教授

マスコミが「脱ダム」「ダムは無駄」「コンクリートから入へ」などと大衆受けする標語でこれでもかとキャンペーンを展開した結果、公共事業は悪者、その中でもダムは最悪者に仕立てられてしまった。

地域の悲願だったダム計画でさえも潰され、潰されずにすんだ計画も事業の停滞を余儀なくされてしまった。

そのような風潮にあっつて、中には河川工学を専門とする大学の先生までもが「ダムは無駄だ」と言い出

した。昨日まで「ダムは必要だ」としてダム事業の先頭に立っていたにもかかわらず、「ダムは無駄だ」と言い出した行政関係者もい

た。マスコミは、そうしたそ

の道の一番の専門家とみなされている人が主張を変えて「ダムは無駄だ」と言い出せば、「それ見たことか、ダムは本当に無駄なのだ」

と確信し、実に勇気ある良識者であると英雄に仕立て上げる。マスコミはことあるごとに、これらの人を専門家に聞くとという形で露出

させる。河川のことなど一切かわりのない世の多くの一般の方々は、巨大マスコミが同じ主張のキャンペーンを張れば、それが正しいと信用してしまっ

た。これまでマスコミに踊らされて「脱ダム運動」をしていた人たちの中にも、少し勉強をすればマスコミのキャンペーンが誤っている

ことに気付く人がたくさんいる。ダムは無駄だと思っていたが実は重要だと気付

き、主義主張を変えた人は、自分のこれまでの無知を恥じてか、ノイジー・マイノリティーからサイレント・マジョリティーに変わって静かにされてしまっ

た。このようにして巨大マスコミがあらゆるメディアを駆使してキャンペーンをすれば、

すべてがその方向に向かっ

ムのことを人一倍研究してきたとの思いがある。災害が多発するようになった現状を踏まえて、ダムはますます必要になってきていることを世の人に知ってもらいたいとの思いから、『ダムは本当に不要なのか』『ダムと堤防-治水現場からの検証』という2冊の本を出した。誰も書かないので、居て

も立つてもいられない気持ちで出版した。当然のことであるが、世の風潮に逆らう主張であるので小さい出版社しか取り上げてくれない。

ダム技術者の集まりであるダム工学会から著作賞をいただくことになった。その表彰の理由が、この世の中でこのような真実のことを主張されることは実に勇

気ある著書である、ということであった。

要はダムの専門家が本当のことを言えなくなったというのである。役人は本当のことをよく分かっているが、大臣の方針に逆らうことを言っわけにはいかなので口を閉ざしてしまっ

た。毎年どこかの地域が手痛い洪水被害に遭っている。それに対し、こつこつとダムや堤防で治水安全度を上げていかなくてはならないのだが、世の風潮に逆らえばマスコミから手痛い攻撃を受けることになる。治水の必要性を訴えることは実は命がけなのである。

日本各地の災害の歴史を調べれば、幕府に地域の悲願である堤防の普請を訴えて、打ち首になった多くの治水義人の話が実に多くある。

昔も今も治水は命がけなのである。

所論諸論

治水は昔も今も命がけ

このように世の風潮の中